

陳千武の短編集『獵女犯』について

工藤 茂

1

二〇〇〇年一月三〇日、陳千武著・保坂登志子訳の短編集『獵女犯』が洛西書院から出版された。

著者の陳千武は台湾の文学者である。同書の著者略歴によると本名、陳武雄、別名、桓夫。一九二二年五月一日、台湾南投県名間脚弓鞋に生まれた。中国福建省からの移民の子供だという。日本統治期の台中第一中学を卒業後、日本軍台湾陸軍特別志願兵としてポルトガル領東ティモールの最前線に従軍。戦後はインドネシア独立戦争に参加した。

台湾に復員して、一九四六年一月から七三年二月まで林業管理所に勤務。その後、台中市政府に入って庶務課長、市立文化センター長、文英館長を歴任した。

詩誌「笠」主宰、台湾ペンクラブ会長、児童文学協会

会長、一九八二、八八、九五年のアジア詩人会議台湾大会会長などを勤める。雑誌「台湾文芸」「文学台湾」顧問。

著書に詩集『密林詩抄』『野鹿』など、小説集に『獵女犯』、詩論集に『台湾新詩論集』がある。一九九二年、国家文芸功労賞受賞。

以上によると陳千武の略歴は栄光に輝いてみえる。しかし、彼はなみなみならぬ辛苦をなめてきた文学者であった。

今、手元に二〇〇〇年二月八日と九日の「東京新聞」夕刊のコピーがある。これは保坂登志子さんから貰ったものだが、それによると、陳武雄は幼時には台湾語で生活していたのに、学校に入ると日本語を「国語」として強制され、日本の敗戦で台湾に帰国すると、今度は中国語（北京語）を「国語」として学び直さねばならなかつ

たという、大変な苦勞と不幸とを背負わされた民族のひとりであった。(もっとも彼は、「日本の人たちは、私が日本語を上手に話すのは日本が無理に日本語を押しつけた結果であり、後ろめたい、濟まないという気持ちを持つようです。それは日本人の感じ方として間違いはないけれども、台湾人からみれば、日本語を話せるということとは決して悪いことではありません。私はもともと河洛語一つしか話せなかったのが、こういう複雑な歴史ゆえに新たに二つの言語を吸収できたのです。日本語しか話せない日本人と中国語しか話せない人がいるという場面でも、ここに私がいれば会話が成立します。複数の言語ができれば当然ものの考え方も多様になります。その意味で、私は彼らよりも優位に立っているともいえるのです。」(東京新聞)と語っている。)彼自身『「狷女犯」日本語版に寄せて』の中で、その苦勞と不幸について次のように述べている。

敗戦兵の身で、植民統治よりもっと苛酷な独裁政
権下にあつて、中国統治者側から、かつて日本の手

先であつたという怨恨を背に受けて生活するのは、
苦にはしなかつたけれども暗く重い体験であつた。

彼の「雨中行」という詩には、そのような体験がうた
われている。

一本ノ蜘蛛^{クモ}ノ糸ガ マッスグニ垂レ

二本ノ蜘蛛ノ糸ガ マッスグニ垂レ

三本ノ蜘蛛ノ糸ガ マッスグニ垂レ

千万本ノ蜘蛛ノ糸ガマッスグニ垂レ

ワタシハ

蜘蛛ノ糸ノ檻ノ中ニ取り込マレル

地面ニモンドリ打ッタ無数ノ蜘蛛ハ

ドレモノタ打ち回ツテ、一度ハ齒向カウ態度ヲ示ス

ダガソノ哀レナ斑ラ模様ガ、ワタシノ衣服ヤ顔面ニ

着キ

ワタシハイマヤ身体ジユウ苦闘ノ痕跡ダラケ

母ヨ、ワタシハ郷愁ノ念ニカラレ

アナタノ温クテ柔シイ手ガ恋シイ、ワタシニ
マトワリ着ク煩惱ノ糸ヲ払ッテオクレ——

秋吉久紀夫 訳

「東京新聞」紙上で、陳千武は聞き手の後藤喜一にこの詩について、以下のように語っている。

「台湾では、夏になるとよく夕立がくる。降り出すときの一滴、二滴……。それが蜘蛛の糸のように見え、檻の中のように感じたのを即物的にとらえたわけです。当然、戦後の政治的な事情が背景にあります。例えば、四七年の二・二八事件ではおびただしい数の知識人、ことに文学にかかわっている人たちが犠牲になりました。雨粒が地面に落ちると、蜘蛛になって跳ね返って反抗しようとする。弱者の反抗、それは悲しいけれども、どうしようもない反抗なのです。私は結局、長いあいだ抑圧されてきた台湾の人々の運命を書いたのでしょうかね」

会話の文中に△四七年の二・二八事件▽とあるのは、日本の敗戦後、大陸から台湾にやってきた外省人と呼ばれた人々の政策に対する不満が爆発して、台湾各地に暴動が起こり、それに対する厳しい弾圧がなされた事件のことである。一九八九年に公開された侯孝賢監督の台湾映画「非情城市」にこの事件前後のことが描かれている。ところで、先に引用した「『獵女犯』日本語版に寄せて」の中に△植民統治▽という語があった。これは日本が台湾を△植民統治▽したことを示すものである。この時彼は、台湾特別志願兵となって日本軍に参加することになる。短編集『獵女犯』のサブタイトルに△元台湾特別志願兵の追想▽とある所以である。それでは台湾特別志願兵とは実際にはどのような兵であったのか。

(前略) 正式の呼び名は『台湾陸軍特別志願兵』である。

私は志願して来たのか？ 確かに私は志願書を書いた。サーベルを腰につけた警察官と兵役官が家庭

に訪問したその日、私は書類に署名し、判を押した。もし私が志願書を書かなかつたら、彼らは私を非国民とみなすのだ。本当は、私は彼らの国民ではない。しかし彼らは私が彼らの国民として登録することを強要したのだ。それは李鴻章が彼らに売った奴隷契約に因っている。だから、もし私が彼らに背けば、彼らは私をいつでも非国民と決めつけ、葬れるのだ。彼らが私の存在、生死の権利を握っているばかりではなく、植民地の住人の運命すべてを握っているのだ。この時代、男の生命の値は「一錢五厘」の郵便切手一枚の価値なのだ。(小説「輸送船」保坂登志子訳より。以下、断りのないのは同氏の訳による。)

これが台湾特別志願兵の実体であった。もっとも陳千武は後に「日本本土からきた人から差別は受けませんでした。むしろ台湾の人が日本のために戦ってくれているというところで、親切にしてくれる人もいました」(東京新聞)と語っている。

この台湾特別志願兵の目がとらえた戦中・戦後の世界

を小説にしたのが、小説集『獵女犯』であった。

2

『獵女犯』は「輸送船」「獵女犯」「生への欲望」「外地に蘇る郷愁」「默契」「遺影」の六編からなる小説集である。「輸送船」の冒頭には「伝書鳩」という次のような序詩が置かれている。

南洋に埋めてある

私の死を 持ち帰ってくるのを忘れてしまった

そこは椰子の樹が生い茂る島々

颯々と続く浜辺と

海上には 原住民の漕ぐ丸木舟……

私は原住民の懷疑心を欺き

立ち並ぶ椰子の林を抜け

鬱蒼とした密林深く入り込み

ついに私の死を密林の一隅に隠した

それで

激烈な第二次世界大戦中

私は悠然と生き延び

重機関銃を手に任務を負い

島から島へと移り戦った

敵の十五ミリ散弾を浴び

敵軍の射撃の的になった

強敵の威勢のいい声を聞いたこともあるが

私はやはり死ななかった

私の死はとうに密林の一隅に隠したから

不義の軍閥が投降してからまっすぐ

私は 祖国に帰ってきた

それでようやく

思いだしたのだ

私の死を 持って帰るのを忘れたことを

南洋の島に埋まっている唯一の私の死のことを

いつかきくと あの伝書鳩のように

沢山の南の便りを持って飛んで来るだろう

△私の死を密林の一隅に隠した▽という詩句は、一種

の比喩である。この時、彼は市民としての自分を殺したのである。戦う兵に邪魔なのは市民の常識と人間性である。それを捨てて戦場に生きた体験が、自分の死と共に作者の内面によみがえってくる。このようにして出来上がったのが短編集『獵女犯』であった。序詩「伝書鳩」は読者にそのことを比喩的に語っている。

さて、小説「輸送船」はこの短編集の序編ともいうべき小説である。その文学空間にはティモール島東部のラウテン港に兵を輸送する船上が使われている。三千トンの輸送船には様々な兵が乗っている。

岩田は鹿兒島出身の、正統な日本人である。

金城は那覇出身の、本土の日本人とは異なる日本人である。

私は、台湾出身の、日本の植民地の植民地人である。

この「私」の目を通して船上の人々が描かれていく。岩田は新兵である。彼は三日も叫び続けている。そして、

夜は暗い大海に向かって泣いている。軍役の義務の重さが彼を狂わせたのだ。「私」は思う。△私はとても狂いたい、が、かえって狂えない。自分を束縛する枷は何なのか私にはわかつている。日本人には軍役の義務がある。彼らは徴兵された現役兵なのだ。しかし我々には義務はない。義務がないということは権利がないのに等しい。

剥奪された権利のかわりに労役の義務を負わされている。これは我々が生れおちた時から引きずってきた悲哀の運命なのだ。新兵の中で我々の正式の呼び名は『台湾陸軍特別志願兵』△なのだ。

輸送船には朝鮮、フィリピン、インドネシアの女性も閉じ込められている。捕獲されてきた女たちである。彼女たちは当然のことが兵士や彼女たちを捕獲してきた権威者たちの手先を敵視している。だが、「私」にはどうすることもできない。△戦場に行く途中では、一切の感情が抹殺されている。(略)ただ人間らしい感情の死んでしまった体が、草色の軍服に包まれているだけ△なのだ。彼女たちはやがて慰安婦となる運命にある。

△彼ら古参兵はみなそうなのか。今日死ななければ、

今日を十分に楽しむ。楽しむことを慰安婦の身の上に委ねるといふのは、憲兵に無理矢理連れて来られた女たちの身体に欲望のシミを烙印のように押しつけるということだ。それが楽しみと言えるのか。ああ！野獣のような兵ども△というのが、「私」の抱いた感慨であった。

突然の敵機襲来！

私の目の前に立っているのは、大隊砲の砲手の台湾特別志願兵だ。私は彼の名がリュウさんだかチョウさんだかわからないが、彼がまっすぐに立てた右肘と右腿は、空から飛んできた重機関銃の弾にあたり、皮肉がすっかり剥ぎ取られて、真っ白い骨がむき出しになり、残った紅い肉塊が斑に白い脂肪にくっついていては惨めな様子は、全く目も当てられない。うおお！ どうしよう？ 彼の大きな体は釘づけにされているように動かない。しかし開かれた目から、涙が止めどなく流れている。

このように、一瞬の戦火が過ぎた後の惨状は人に吐き気を催させるV状況であった。あたりは血の海に変わっていた。

屍の横たわっている甲板には、私一人が、捜し物をするリスのようにとび跳ねていた。船橋の下に跳び、階段をよじ登ろうとした時、私はぞっとした。

また一人台湾特別志願兵がいた。彼は私の所属の兵ではないが、階段の一番下の蹴込に頭を挿し込んで、白目を開けて死んでいる。上半身に怪我はないが、彼の両腿は、太腿の中ほどから切断されて、その両足はどこへ行ったのか分からなかった。切断された所は紅い肉塊が露出しており、少しも動かない。

敵機はこのように容赦なく人命を奪う。ティモール島に上陸したときには、豊原媽祖廟の守り札があるので絶対死なないと言っていた台湾特別志願兵の謝蜀も、狂人になった岩田もついに下船することはなかった。へまだまだ沢山の新兵、かわいそうな女たちもついに上陸して

来なかったV。

これが台湾特別志願兵の「私」の目によって捉えられた船上の悲惨な情景であった。戦争は常に非人間的である。戦死者は悲惨の一語に尽きる。台湾特別志願兵の戦死はことにも不条理である。作者はその戦死者の姿を客観的に描くだけで、何等の感情も挟もうとしない。それがかえって読者の心を打つ。

ここは戦地である。戦地で、我々はどんな戦闘に参加するのか分からない。とりあえず私は、自分の死を密林の一隅に隠すべきだ。謝蜀が彼の死を海底に沈め隠したように。密林。誰にも見つからない、私の死を埋め隠した密林——神秘の密林。死ぬなら、私は自分の死を死んでやる。

「前進！前——進！」
未知の世界に向かって、我々は出発した。

序詩「伝書鳩」に照応する以上の場面で小説「輸送船」は終わる。

二番目に置かれた小説「獵女犯」は「輸送船」から降りて上陸したティモール島東部が舞台である。ここはどこに行くこともできない天然捕虜の島であった、と小説には紹介されている。主人公は「私」に代って「林兵長」となる。この小説が「輸送船」の延長線上にあることは、あるいは沈没した輸送船と共に海底に葬られた謝一等兵▽という表現から察せられる。それゆえ、林兵長は「輸送船」の「私」と考えてよかろう。

この小説は林兵長と現地で獵った女ライサーリンとの奇妙な関係を軸にして展開されていく。

小屋の中の人は、歩哨の足音に気づき、とっさに声を押し殺し、息を潜めたようだ。中の二十数人の女は、昨日、北海岸のラガ部落から召集してきた者たちだ。召集とは言うけれども、それはつまり無理やりに拉致して来たのだ。部隊の兵士を慰安するために、飢えた狼のような兵士たちの淫欲を発散させ

るために、部隊は公然と出動して、女狩りをし、罪のない女たちをバギヤ城の地獄へ引きずっていくのだ。

ライサーリンは小屋の中の二十数人の女の一人である。彼女は彼女たちを護送する林兵長のよく知っている言葉、閩南語系の言葉を話す女であった。△これは秘密だ。彼女の秘密はまさに林兵長の秘密でもある。同民族、同血統であるという秘密を持つことは、何と言う感動だろう▽と彼は思う。そして彼女に郷里台湾のことを話す。

「——?…… あなた、私をだまさないでよ!」
「ぼくは君をだましてなんかいないよ。ぼくだって福老人フクリョウジンなのだから」

彼女は急に狂喜じみた、しかし注意深く、おし殺した声で叫んだ。

「違うわ、あなたは違う、あなたは日本鬼、日本鬼よ」

憎しみと恨みを込め、軽蔑と憤りの気持ちを抱き

ながらも、彼女はあたりに気を遣って、怒りの衝動をこらえながら彼を睨みつけた。

正規の日本の軍服を着ている林兵長は、家庭の婦人を強奪する共犯者なのである。今どうにも説明したい矛盾した苦しさに直面し、強奪されて来た女に頭を垂れ、悪びれずに、おとなしくただただ頭を横に振って、意味もなく笑顔を見せるだけであった。

ここには台湾特別志願兵の複雑微妙な立場が描かれている。「福老人」というのは福老語^{フクロコ}を話す人のことである。福建省から移民して台湾に住んでいる人々の話す言葉だという。ライサーリンは華僑であった。父親と祖父は中国人とインドネシアの女性との間に生まれた人間であり、母親は中国人とオランダ人との混血児だという。家族の仕事の関係でラガに住んでいたのを、日本軍によって拉致されてきたのであった。彼女の眼には疑惑が浮かんでいる。

「きみが捕えられて来たのと同じようにぼくも強

迫されてここに送られて来て、兵士になったのだ。誰が本心から自分で願って出て兵士になんかなるものか」

これは、いくらじたばたしても抜け出せない現実である。こういうことは、被植民地の弱者同士の切実な問題に関わることで、むしろ彼女にも理解できる。また、彼も同じような目に遭っているのだという、一種の親近感を覚えさせた。

彼女は林兵長に、あなたが本当に福老人なら自分を助けて家に帰らせてくれという。しかし、現在の彼の立場ではそれは不可能であった。彼は思う。△日本帝国軍人は、禍いの源だ。皇軍と称して、その権力を以て世界を戦争の渦にまき込み、侵略を意図している▽と。

ライサーリンは母とラガの家にいる時、日本軍に捕えられたのであった。彼女の母は日本兵にけとばされて溝の中にひっくり返り、彼女だけが無理やりジープに引き上げられて拉致されて来たのである。彼女は言う。

「わたし、日本鬼が大嫌い、あなたも大嫌い」

「きみが、ぼくを嫌いなのはわかっている。きみが言わなくても、ぼくだって、ぼく自身が嫌いだ……」

「あなた、自分のことが嫌いなら、どうしてまだ彼らと一緒に悪いことをしているの？」

「これが軍隊の規律と命令だから、従うしかないのだ。ラガ部落の酋長だって、命令をするだろう？」

「酋長の命令は、わたしたちの家をこわすことはしません。日本鬼の野蛮人がわたしたちの幸せな生活をめちゃくちゃにするだけよ」

林兵長はライサーリンの言葉を聞いて、**／＼**ああ！人間性を失った野蛮な軍隊は、野蛮人の集団であって、盗賊団になっているのだ。ただ人々の幸福を破壊する、これが戦争か？人の生命を尊重しないのが戦争の本質か？**√**と、厳しく自己に問いかけるのである。そしてこのような批判は、この小説の随所に織り込まれている。

林兵長たちがこれらの女性をバギヤ城へ護送する途中、捕えられた妻を取り戻そうとして逆にかまる原住民や、

林兵長と准尉の同性愛などもこの作品には点綴されるのであるが、小説の流れは捕われてきた女性たちの教育へと展開されていく。

ラガ部落から奪って来られた女たちは、早速、野戦慰安所に送りこまれて、訓練を受ける。訓練を受ける期間は少なくとも一か月で、訓練が終わらないうちは、如何なる客の接待も許されない。(略)

話によると、慰安所内には、内地から来た女性が二人いて、この捕えられて来た女たちの指導に当たっており、一か月かけて、毎日、彼女たちに男の接待の仕方を教えこんでいるという。(略)

内地から来た女性は、皆、芸妓出身である。その中の一人の日本人は、日本女性特有のおとなしさとやさしさで彼女たちに男の操縦法と、その感情を解かす要領を教えている。もう一人は、朝鮮北方から召集して来たアリランの女性である。彼女が教えることは、性愛の技法に関する類である。

その間に彼女たちの性病検査が軍医によって行われる。その時は大騒ぎになったという。小説には、現地の女たちは、もともと貞操観念が薄いが、男性である軍医に、いきなり彼女たちの身体を検査されたら、医学の知識がない彼女たちが、大さわぎしてもあたり前だ、と書かれている。こうして彼女たちは慰安婦への道をたどらされるのである。

ところで作者は、彼女たちの慰安所での生活を次のように描いている。

(略) 文明生活を経験した事のないライサーリントンとしてみれば、彼女が今味わっている軍隊生活の衣・食・住は、自由な文明社会程は気持のよいものではないにしても、彼女にとってはとても珍しくまた羨ましいもので、今までの原始的な生活よりは、はるかに心地よいものだ。それは田舎の少女が、都会の繁華な生活にあこがれるのと同じようなもので、……慰安所の生活は、現地の女を大いに魅惑するものであった。毎日入浴を強いられる彼女たちは、温

水の入浴はあまり好きではないが、洗う時に使う石鹸のいい匂いが、スタイルのよい彼女たちの身体の汚れと、原住民女性独特の体臭を洗い落とし、快適な気分させ、文明生活の良さを味わっているのだ。夜は特製の木のベッドで眠るのだが、ベッドは床から高く上がっており、軍用の毛布にくるまると、とても暖かい。それは木の枝の上で、鳥の巣のような竹籠に眠る、或いは地面に椰子の葉を敷いて寝る、そしてたき火か、または薄くて汚れたサロンで体を暖める、そんな暮らしをしている自分の家の生活とは全く違う。それに毎日の食事は、米ご飯とトウモロコシと赤く焼いた野鹿の肉であり沢山の種類のおかずと、熱あつの魚肉を金属の碗や皿に盛って、簡素なテーブルの上に置いて椅子に腰かけ、きちんと食べている。彼女たちはこれらさまざまな規律に慣れてはいないが、今までの生活に比べれば、ずい分恵まれておりとても楽しいのである。これは生活の新しい変化である。捕えられて来た当初には、想像もつかなかったものだ。捕えられてきつと苦しい仕

事をさせられるものと思つていたのだが、たった二日間ここで生活しただけで、ライサーリンの振舞には、新しい変化がおこり、一人の新しい女に変わったのだ。

作者は彼女の変化した姿を林兵長の目を通して次のように描いている。

(略) 彼女は、慰安所で配給された、体にびつたりした白いシャツを着ており、それは長袖で、膝の上を被う長い服だが、肩だけが露出していて、胸と腰の曲線が優美で、スタイルがいい。原始的な生活で、普段野性的に動きまわっている現地の女性の体つきは皆とてもいいスタイルをしている。こういうスタイルの身体にびつたりした現代風の白シャツを着せられると、露になった身体の線はかなりセクシーで男を魅惑するのだ。(略)

苛酷な状況に置かれた女性の生活をこのように描く目

は、林兵長の(それはまた作者の目でもあるのだが)精神的なゆとりであろう。ライサーリンにどのように言い訳しようとも通じることのない台湾特別志願兵の苛酷な立場、それは言い換えれば彼女の置かれた苛酷な状況と同じなのである。彼女には林兵長の持つ精神的なゆとりがない。ないのが当たり前であろう。林兵長にはそれがあつた。恐らくそれは、彼がすでに自分の死を密林の一隅に埋め隠してきたからにちがいない。陳千武の戦争小説の特色は、まさにこのような精神の余裕と視野ののびやかさにあつたのである。そのために、異常な戦争空間の中で、残酷な場面ばかりではなく、平穩な光景や牧歌的な情景をも写しとることができたのであつた。そしてこの特色は、「生への欲望」「外地に蘇る郷愁」「默契」にさらに顕著に見えている。

さて、このように優雅な生活を過ごしたライサーリンたちを待つていたのは、そのような生活とは対極をなす「獵女犯」の世界であつた。

「ここに外出証がある。各人に一枚渡す。明日、

朝飯を食べ終わったら、各自行動してよろしい。隊長は、それぞれが全員、慰安所に行くよう命じている。ここ何週間来の緊張を解きほぐして、さっぱりして来い。これは唯一の新陳代謝である！ もしも慰安所にはなかった者がいたら、罰として三日間衛兵勤務をさせる。分かったか？」

ライサーリンたちにはすでに名前はなかった。すべて番号で呼ばれるようになっていた。林兵長も慰安所を訪れる。彼女は6号。彼はその切符を買う。

ライサーリンはまっ白いシャツを着て、女医のように立っていた。彼女はにこりともしない。二人は互いに見つめあった。

「あなたも狩りに来たんじゃないの？」と彼女が言う。
「狩り？ これは何という微妙な言葉だろう。その実、狩る者と、狩られる者の間にはどれほどの違いがあるのか？ 本当の狩人は誰なんだ？」と林兵長は心で反問する。

「ぼくは君に会いに来ただけだ。ぼくには狩りはでき

ないよ」

実際、連日來の激しい訓練で彼の男性自身は眠っていた。しかし、ライサーリンは信じない。何をしに来たのか、何をしてほしいのか、と彼女は彼を問いつめる。林兵長は何も要求しない、自分の持ち時間の二十分間だけで過ごしたいのだと答える。林兵長たちが決死隊の訓練中であることを知らない彼女は、どうしてこんなに長い間こなかったのかと彼をなじる。訓練中で仕方がなかったのだと答えると、あなた方日本軍はどうして自分と同じ味方を虐待するのかと言う。虐待ではなく訓練だと言っても彼女には通じない。彼女は言う。わたしたちをここに狩り集め、訓練と言って虐待している。あなたたちのようにつまらない人のために、わたしたちを無理やり奴隷にして働かせるなんて。

「そんな言い方しないで欲しい。ぼくらは、きみたちに比べればもっと辛いんだよ」

「辛い？ あなた、辛いなんて思っているの？ 何のため？ 人を狩る罪悪感で辛いのか？」

ライサーリンは非常に激昂して顔がまっ赤になった。

外に待っている人から、まだか、早くしろと声が掛かった。持ち時間が終わるにはまだ早かった。しかし、林兵長はこれ以上ここにいる必要はないと判断した。

「さよなら、きみ、身体を大事にしてくれ」

ライサーリンは、彼が帰ろうとするのを見て、一瞬躊躇したが、雌豹の様な目つきで彼を見たかと思うと、突然彼の胸にとび込んで、手をつかんで言った。

「いっちゃいや、あなた、もっといて」

「きみはぼくを嫌いなんじゃないのか？」

「わたし、あなたが嫌い。でもわたし、あなたに、わたしを狩って欲しい」

ライサーリンは言いながら、しっかりと林兵長を抱きしめた。

林兵長は、女の髪の毛の香をかき、半ば受けとめながら彼女を抱き、心の中で思っていた。

「ぼくのように無能な猟女犯は、どうすればいいのか?……」

これまでに検討してきたように、この小説は、戦地において軍に拉致された女性が、慰安婦となるまでの過程を描いたものであった。そこに林兵長とライサーリンという人物が配されて、ストーリーが進展していく。この二人はちょうど合わせ鏡のように設定されている。そこに写っているのはライサーリンであるが、それは同時に被害者としての林兵長の姿でもある。確かにライサーリンは被害者である。だが、林兵長は被害者であると同時に、自分の意思に関係なく加害者としての一面も持たねばならなかった。それゆえ彼は、鏡に反射して戻ってくる自分の姿に深手を負ってしまう。この苦悩はまた、台湾特別志願兵であった作者のそれでもあった。そして、この工夫がこの小説を優れたものに行っているのである。ちなみに「猟女犯」は吳濁流文学賞を受賞している。

4

この短編集に収められている他の作品のうち、「猟女

「犯」と同じティモール島が舞台になっているのは「生への欲望」である。ここには残酷で激烈な戦闘はない。むしろ原住民のゆったりとした生活と、それに関わる林兵長の姿がどちらかといえば牧歌的に描かれている。働くうとしない原住民を使ってトウモロコシの増産に成功する苦勞、隣国アロハプア国王の娘スーシャンの誘惑、逃亡兵モロナとの再会等。しかし、これらの光景もまた戦争中の一場面だったのである。

「外地に蘇る郷愁」と「默契」の作品は、舞台がティモール島からジャワ島に移る。陳千武の軍歴表（『獵女犯』掲載）を見ると、作者は一九四五年七月一六日、勢第三号作戦（軍の作戦暗号）に参加のため、ティモール島を出発、一九日ジャワ島に上陸している。この体験が上記二作品の舞台をティモールからジャワに移した理由であろう。

ところでもう少し軍歴表をたどって見たい。

同年八月一五日 日本無条件降伏。部隊はイギリス軍指揮の下、インドネシア独立軍作戦に参加。

実は作者の以上の体験が、「外地に蘇る郷愁」と「黙

契」の二作品には投影しているのである。前者は八日本が無条件降伏をして間もなく、ジャワ島バンドン市郊外に駐屯している乾大隊本部は、うろろうしている自暴自棄の官兵に対応する事や、食糧運搬用のトラックの指揮に忙しく、隊の内外は毎日ひどい騒がしさだった▽と書き始められる。ここで描かれるのは、敗戦後自裁したインドネシア義勇軍担当の教官であった日本の青年中尉ではなく、乾大隊長その人である。

「このような時、士官も兵卒も、事態の厳しさをしっかり考えなければならぬ。軽挙妄動、自暴自棄、破壊行為、武器の隠蔽、殊に自殺は許されない。こんな時ここで、もし自殺する者があれば天皇陛下への不忠であり、父母に対する忘恩不義であり、これに勝る重罪はない……」

敗戦の時に、将兵を前にしてこのような訓話をするのが乾大隊長である。彼は林兵長を伴い、「玉記企業会社」を経営する華僑の温さんのもとに、一時、大隊を移動さ

せるための広大な土地を借りる交渉に出かける。温さんは日本はすでに敗けているので、軍が帰国する時に、すべてを返還してくれるのであれば、ただで貸そうと言う。しかし、乾大隊長はやがて英軍が来た時、英軍が広大な土地を日本軍用地と誤解して接収するといけないからと、名義上は相当高い価格で借地契約書を書くことにする。

「私は沢山の日本人を知っていますが、乾大隊長の考えのように、相手が損失を受けるのをおそれて、各方面に配慮され、こんなによく行き届いた方はめったにいません。戦乱のさ中であっても、律儀な人がまだいる事は明らかですが、こういった善良な弱者は、乱暴な人間に騙され易く、無法者が台頭するのです。善良な人と交際できる事は本当に人生の喜びで、またよかった事は、戦時中に私が出会った日本人のほとんどが、私に対して良い人だった事です。本当にこれはとても幸運でした。」

これは温さんが林兵長に語った内容である。作者はこ

のような日本人をも掬い上げて、小説の中に登場させているのである。そこに作者の公平な目を読むのは私ばかりではあるまい。

「默契」は、敗戦後、イギリス軍総司令部によって、オランダ人居住区の治安維持の役目を任せられた日本軍と、インドネシア独立軍の間の奇妙な默契を描いた小説である。

(略) インドネシア独立軍は、日本軍に代わって治安の実権をにぎり、インドネシアの独立を促すことを意図している。更に彼らは、日本軍から全ての兵器を独立軍に渡すことを要求している。戦に敗れた日本軍は、インドネシア独立軍と戦う気持はないし、また統治者の態度で出てきたイギリス、オランダ連合軍に利用されたくもないのだ。特にオランダ軍はこれまで日本軍の捕虜にされていたので、恨みの気持があるばかりではなく、過去三百年インドネシアを統治したうま味に、まだ未練があるのだ。それで、到る処でイギリス軍を唆し、日本軍を脅迫、命令し、

彼らに代わって、インドネシア独立軍と戦わせる作戦をとり、主権の奪回をねらっている。日本軍は、戦勝国であるイギリス軍に逆らうことはできないので、やむなく兵を派遣して第一線でゲリラ隊と対決している。

当時のジャワ島バンドン市における各国各軍の複雑な図式を、作者はこのように紹介する。これを読むだけで、つい苦笑してしまふ。が、これもまた当時のリアルな状況だったのであろう。作者はさらに続けて以下のように書く。

ゲリラ戦は毎日何回かあるが、これまで負傷した者や戦死した者はいない。と言うのは、インドネシア独立軍と日本軍の間には、奇妙な默契があり、双方共に、ただ空に向けて遠くに銃を撃つだけか、さもなければ木の根を目標として発射するだけだからだ。敗戦の打撃を受けた幾人かの日本兵は、こっそり兵舎を脱出して、インドネシア独立軍に入り、軍

事訓練を担当し、インドネシア軍のゲリラ戦を指導し、また指揮しているのだ。しかし、ゲリラの相手は日本軍であるとは思ひもなかった。そこで互いの暗黙の了解が成立したわけで、ゲリラ戦は面白い戦争ごっこになり、軍の訓練や演習よりむしろ楽で、少しの苦労や悩みもなかった。

イギリス軍やオランダ軍を出し抜いて、このような戦闘をしている日本、インドネシア両軍の様子を、作者はユーモラスに表現する。これも作者のおおらかな人間性の表れであろう。このような状態の街で林兵長は知り合いのオランダ娘を助けてやる。

戦争文学には違いないが、どこかおらかな小説である。けれども、苛烈な戦争の合間にはそんな一場面もあったであろうと、私は納得させられたのであった。

5

この短編集の最後に置かれている「遺影」は、これま

での小説とは異なり、台湾が文学空間として設定されている。欽は台湾特別志願兵としてティモールへいった。

が、敗戦後無事に台湾に戻ってきた。にもかかわらず、戦後間もなく勃発した動乱事件で、治安の兵士に誤って射殺されてしまった。その欽の遺影の前で、かつて彼の恋人であった彼女は自分と欽のどうしようもない行き違いの運命に、思いをはせる。欽は出征する前、彼女に決して看護助手に志願してはいけないと言いつつ残して戦地へ行った。彼女は欽との約束を守って、決して志願しないつもりであった。なぜ、欽はそのようなことを約束させたのか。それには以下のような理由があった。

誰もが知っているように、看護助手というのは日本軍の侵略戦争さ中、野戦病院に配属される女のことである。当局は、わざわざ彼女たちに看護助手という名目の仕事をさせ、兵士や軍医を懐柔する道具にするともに、飢えた狼のような男に仕えさせるのだ。表面上彼女たちは従軍婦人と称され、名譽を与えられている。しかし戦地ではあれら飢えた狼男

たちは、ひそかに彼女たちのことを『P』と呼んでいる。意味は慰安婦の類を指す。それほど下賤なのだ。

ところが、△よくある通俗小説や芝居の中の物語▽に出てくるような事件が彼女を襲い、その難を逃れるために、彼女は看護助手を志願せざるを得なくなった。そのことを彼女は手紙に書き、ティモール島の欽へ送った。欽は返事の手紙をよこさなかった。彼女は続けて何通もの手紙を書いた。が、ついに欽からの返事はなかった。やがて戦争が終り、欽は無事に帰還する。しかし、二度と彼女の前に現れることはなかった。

今、彼女は欽の遺影の前で△恨みと愛は隣り合わせに存在していることに気づき、とても驚きいぶかっ▽ていた。欽の心の内深くに△恨むことと愛することが▽共に隠されていたことを知った。それは彼女を悩ませ、悲しみ惑わせ、後悔と自責の苦痛に陥れた。

彼女は欽が弁解するチャンスを与えてくれないまま、死んでしまったことがとても信じられなかった。しかし、

今となってはどうしようもなかった。

今更なにを説明してもだめだ。

彼女には全てがはっきりとみえてきた。

霊前から離れようとしたとき、彼女の目は霊台の上の一枚の粗末な便箋に、一篇の詩が書かれているのをとらえた。明らかにそれは欽の筆跡だった。

夢・脱落（この詩省略）

ああ！ 彼と別れてから、彼女は欽が書いた詩を見たことがなかった。今見た詩が欽の唯一の遺作であって、欽の夢は早くも脱落してしまっただけ。しかし彼女の夢は？

彼女はその便箋を持って霊堂から出て来た。ついに果たした再会！ これでよかったのだ。

それから、彼女はしっかりした足どりで歩いていった。

この小説は、彼女が遺影の前で欽との過去を回想するというフラッシュバックの技法で構成されている。だが、

その構成法ではなく、欽と彼女を襲った歴史に心動かされる。慙愧の念を禁じえない。日本による台湾の植民地化と第二次世界大戦さえなければ二人の人生に齟齬は起きなかった。作者は△それから、彼女はしっかりした足どりで歩いていった▽という最後の一行でヒロインに祝福を与えている。それが読者の救いになっている。

さて、陳千武の『獵女犯』は、これまで見てきたように戦後の日本の戦争文学とはいささか趣を異にした戦争文学であった。文学的なものは日本語を学んだ時に身につけたという作者であるが、やはり、台湾特別志願兵の目は、軍役の義務によって徴兵された現役兵の目とは異なるものをしっかり見ていたのだ。

△参考資料▽

陳千武著・保坂登志子訳『獵女犯―元台湾特別志願兵の追想―』（二〇〇〇年一月刊・洛西書院）

秋吉久紀夫訳編『陳千武詩集』（一九九三年二月刊・土曜美術社出版販売）

秋吉久紀夫著『陳千武論―ひとりの元台湾特別志願兵の

足跡―』（現代詩人叢書・土曜美術社）

「東京新聞」二〇〇〇年二月八、九日夕刊（「台湾の詩人陳千武さん」聞き手後藤喜一）